

ゴサイマス。コノホトクサマハ、カネデコシラヘテアツテ、ソノ高サが五丈三尺アマリア
リマス。モシ、人ガソマヘニタツト、チヨード、小サナニンギトガ、タッタヨニ見エマ
ス。

第四時

一 教材

奈良トイフ：(六十六頁五行—同八行) 及全体の復習

二 教法

豫備

1 前回の大要復習。…丈、尺、名高イ、書板。

2 奈良といふ所は、元何があった所だといったか。…神武天皇の御陵も
この同じ國にあること。

提示及練習

1 書に就き、數生に練讀せしむ。

「ソノコロ」いつの頃か。…こゝは、何のことを書いたのか。

2 本課の初めより、適宜分節して讀ましむ。

大佛の事柄を書いた所は何處か。…その前(第一二三節)は、何のこと
か。…なぜこれを書いたと思ふか。

未節は何か。…なぜこれを書いたと思ふか。

3 書を離れて成るべく敷衍して話さしめ、後次の如き語句を書取らしむ。
五丈三尺。 タイソー名高イ。 天皇ノゴテン。

○奈良ノ大佛

ワガクニノ、ズットムカシニハ、ホトケサマモ、オ寺モ、アリマセンデシタガ、ソング
皇后ガ、三カンヲセイバツナサレテカラ、ダンダント、デキテキマシタ。

ナラノダイブツハ、日本デ、イチパン、大キナ、名高イホトクザマデ、ソノ高サガ、五丈
三尺アマリアマス。

コノダイブツハ、ナラニ、天皇ノゴテンノアツタトキニ、デキタノデ、ソレカラ、センネ

枝とどう書くか。…猿の人に似て居る所は何處か。

なぜ「たいてい」といったのか。…ここは猿の何んなことか。

2 尙練讀せしめ、且話さしむ。

第二時

一教材

手足には… (六十七頁六行—六十八頁七行) しこみます

1 語句 枝から枝へ。しこみ。

二教法

豫備

1 前時の處を、一二回讀ましむ。

提示

1 書に就き、先づ默讀せしめて、その大要を話さしめ、後讀ましむ。

「枝から枝へ」どうすることか。…この語に倣つて何か言へ。…「しこみ」

どうすることか。

2 練讀せしめ、且話さしむ。

第一節はどんなことか。…第二節は何んなことか。…然らば此處までは、何のことを書いたのか。…

第二節の第一句と、第二句とを續け得るか。(てきますから枝から枝)

第三節の二つの句も續けて見よ。(しますから人が)

3 適宜の語句を書取らしむ。

第三時

一準備

讀本と同様の圖。

二教材

あるひ… (六十八頁八行—六十九頁七行) まひました

1 新字 赤。

2 語句 さるまはし。えぼし。そてなし。はやし。

ンアマリニナリマス。

だい二十 さる

本課に於ては、猿の形態、習性を考察せしめ、且新漢字二を授く。

第一時

一 準備 猿の標本

二 教材

だい二十……
いきています (六十七頁一行—同五行)

1 新字 枝。

三 教法

豫備

1 面部は毛少く、その色赤くして、兩眼は共に前に向ひ、二つの鼻孔も、相接近して、殆んど人に似て居ること。

2 口は突出して、恰も犬の如く、臀部は赤くして、その皮膚大層厚く且強

きこと。

3 前肢も後肢も、殆んど一樣にて物を握り得て、樹上の生活に適すること。

4 乳房は、人の様に胸部に一対ありて、一回に一兒を産み、よく愛育すること。……親子間の情深くして、その情の爲めには、時に自己の生命をも忘るゝこと。

5 深山に棲み、常に群をなし、木實、菜蔬等を食す、頬に囊ありて食物を貯ふること。

6 猿は特に人生に益することなきも、諸藝を教へて、人の樂みに供すること。但小とさき子の時教ふること。

提示及練習

1 口唱して書取らしめて讀ましむ

枝とどう書くか。…猿の人に似て居る所は何處か。

何ぜ「たいてい」といったのか。…ここは猿の何んなことか。

2 尙練讀せしめ、且話さしむ。

第二時

一教材

手足には… (六十七頁六行—六十八頁七行) しこみます

1 語句 枝から枝へ。 しこみ。

二教法

豫備

1 前時の處を、一、二回讀ましむ。

提示

1 書に就き、先づ默讀せしめて、その大要を話さしめ、後讀ましむ。

「枝から枝へ」どうすることか。…この語に倣つて何か言へ。…「しこみ」

どうすることか。

2 練讀せしめ、且話さしむ。

第一節はどんなことか。…第二節は何んなことか。…然らば此處まで
は、何のことを書いたのか。…

第二節の第一句と、第二句とを續け得るか。(てきますから枝から枝)

第三節の二つの句も續けて見よ。(しますから人が)

3 適宜の語句を書取らしむ。

第三時

一準備

讀本と同様の圖。

二教材

あるひ… (六十八頁八行—六十九頁七行) まひました

1 新字 赤。

2 語句 さるまはし。 えほし。 そてなし。 はやし。

三教法

豫備

1 前回の大要復習。…小太郎の村は、何んなところであつたか。…小太郎の家は、何處にあつたか。

猿廻しを見たるものに、その模様を話さしむ。

提示

1 書に就き、一二生に讀ましむ。

「さるまはし何のことか。…」えぼし「何んなものか。…」そてなし「何んなものか。…」はやし「どうすることか。」

2 尙練讀せしめ、且話さしむ。

「赤」の「」を「く」とすればどう讀む。…その外に送り假名を付け得ぬか。(きし)

前時までの處は何のことか、今日の處は何のことか。

3 本文を口唱して、迅速に書取らしむ。

第四時

一教材

小太郎は…
いきました (六十九頁八行—七十頁五行) 及全体の復習

二教法

豫備

1 前回の大要復習。…赤いえぼし等、書板。

提示及練習

1 先づ默讀せしめ、その大要を話さしめて、後讀ましむ。

2 尙練讀せしめ、且話さしむ。

「は何ぞ附けたのか。…」ていねいに「を省かばどうか。

この第一句と、第二句とを續け得ぬか。(よろこんでごぼーび)

1 本課の始めより讀ましめて、語句并に各節の關係等を問答す。

○さる

さるは、たいそ、人にてゐるけもので、ちくやまの木の枝の上などにすまうて、木の
みなどをたべてゐます。

手足には、ゆびが五本づつあつて、足も手のよゝに、ものをにぎることが、できますか
ら、木の上をわたるに、つこゝがよいです。

さるは、なかなか、わるがしこいけれども、あやは子をかはいがり、子はあやをたいせつ
にして、たいそ、かんしんな、けものです。

このけものは、あまり、人のやくにたちませんが、よく、人のまねをしますから、人がこ
れに、いろいろのげいをしこんで、みせものにしたたり、たのしみにしたります。

國定 讀本 每時教授細案 及教授法 尋常小學讀本卷四終

明治三十七年七月廿一日印刷

明治三十七年七月廿四日發行

讀本教授細案卷四

定價金三十錢

著者 遊佐誠甫

發行者 會社名 金昌堂

右代表者 杉山辰之助

印刷者 多田三彌

印刷所 惠愛堂

東京市麹町區内幸町一丁目五番地



發賣所 關西大賣捌

東京市日本橋區
本石町三丁目
大阪市東區
南久寶寺町

會社名 金昌堂

前川善兵衛

